

平成30年度中学生・高校生の国際理解・国際交流論文

中学校の部 最優秀賞



私が奪っていたもの

福島県立会津学鳳中学校

1年 庄條 はる

まずしさをほっておくということは
弱いものいじめをして
こっそり奪っている
ということとおなじ
卑怯なこと

私はある本でこの言葉に出会った。環境保護活動家、マエキタミヤコさんの言葉である。あまりに強い言葉に反発さえ覚えた。私たちの住む「先進国」は、貧しい国や人々に毎年巨額の援助をし、またその国の商品を消費することで利益をもたらしているはずだ。では、この言葉にある「こっそり奪っている」とは何のことなのか。私は何を奪っているのだろうか。

例えば寄付である。団体や企業で、古着や電化製品などの寄付が盛んに行われている。もう必要なくなったものを寄付できたら、捨てずにすんで必要な人に届いて喜んでもらえるのだから、一石二鳥だと思っていた。しかし、調べてみると、欧米諸国の大量の古着が転売され、輸出という形で低所得国に送られている。その安価な古着の大量流入は、低所得国でのアパレル製造業に深刻な悪影響を及ぼしているという。その深刻さは、いくつかのアフリカの国々が中古衣料品の輸入を禁止する計画を立てているほどだ。安易な善意の押し付けが、受け取る側の人々を苦しめてしまっている。私と妹が着られなくなった衣類も、寄付することが多い。その衣類はどこにどんな形で届いているのだろうか。寄付する側にも行先を見届ける責任があり、ただ差し出せばいいというものではなかったのだ。

では、途上国でつくられたものを買うのはどうだろうか。大好きな南国のフルーツやチョコレート消費する事は、生産国の人々の収入になり、結果的に支援には繋がらないのだろうか。

これもほんの少し検索するだけで、「換金作物」という言葉に出会った。換金作物とは、外貨を稼ぐために栽培される輸出用の作物のことである。この換金作物が貧困を招くという。仕組みはこうだ。外貨を得たい国や企業が、換金作物を優先して栽培させる。そのために、人々が生活するための自給用作物が不足する。換金作物の輸出で得た収入で食糧を

輸入し、国内の人々はそれを現金で購入することになるわけだが、貧しい農民は作物が高く買えない。その結果、飢餓や貧困が起こってしまうのだ。また、その換金作物の価格競争などの影響で、働き手を増やさなければならなくなり、教育を受けられない子供が増えるという側面もある。私の祖父母が子供の頃は、バナナは高級品で風邪でも引かないと買ってもらえなかったそうだ。今は、私のお小遣いでも買えるような値段で売られている。それにはそんな理由もあるのかもしれない。

また、私が小さい頃から動物番組で見ていたボルネオ島の熱帯林では、いろいろな動植物が絶滅の危機にあった。熱帯林そのものが姿を消していたからだ。それについて調べてみると、熱帯林はアブラヤシのプランテーションに代わっていた。アブラヤシからはパーム油が採れる。パーム油は、加工品や洗剤などに使用され、私たちが知らぬ間に生活の中に深く入りこんでいる。なぜなら、植物油の中でもより多用途に利用できること、価格が比較的安価であることなどから需要が高いからだ。しかし、一定の雨量を必要とするなど、栽培できる環境が限られており、それに適したボルネオの熱帯林が使い尽くされている。絶滅危惧種にとっても危機的な環境だが、その森とともに暮らす先住民も、同じ生活を続けることができなくなってしまった。食べ物を得るために、貨幣を稼がなければならなくなったのだ。これを、私たち先進国のものさしで言うと、「開発」ということになるらしい。しかし、本当にそうだろうか。

今まで挙げてきた例に共通する問題は何なのか、私は大きく分けて二つあると思う。

まず、先進国が、自国だけでは持続不可能な社会を維持するために、彼らの生活を壊すことは絶対にあってはならない。先進国にあるよりよいもの、より便利な暮らしのために、地球上の資源を使い尽くしそうなスピードで消費する、使い捨てる。そんな社会こそ、今すぐ改めなければならないと思う。

そのために、一人一人には何ができるだろう。例えば今の私は一消費者だ。毎日パーム油や換金作物を消費し、寄付したつमोरの衣類は思わぬ形で迷惑をかけているようだ。でもこれからは、商品を手にするときには考えよう。この商品が何でできているのか、どこでどんな形で誰が関わっているのか。そして、できるだけ誰からも奪っていない商品を選ぼう。手に取ったら、大切に大切に消費しよう。手離す時は、行先をきちんと見守れる方法を選ぼう。

2つ目は私たち先進国に暮らす人たちの思い込みだ。「自分たちのように、誰でもお金を稼いで幸せになりたいだろう」という思い込み。自給自足の生活は貧しいからかわいそうという思い込み。そのような勝手な価値観の押し付けが、低所得国の人々の生活をより貧しく、困難にしてしまっていないか。彼らの生活が、日本の様に物を消費する生活よりも不幸だ、とは必ずしも言えないはずだ。だから、何が幸福かをそれぞれが自分で考え、決めるチャンスを奪ってはならないのだ。

そして、彼らが自分たちの幸福を考える時、寄り添って一緒に考える事、それが援助のスタートであるべきだ。そうすればきっと、本当に必要な援助ができるのだと思う。

私は何も知らなかった。私の「無知」が奪っていたものは、彼らのこうしたチャンスだったのだ。

知る力をつけよう。広い視野で、便利や快適の裏側を見極める力をつけ、社会がその仕組みを改める時、しっかり意見を持って参加できる社会人になりたい。